

会 議 録

会議の名称		令和3年度つくば市バースセンターに関する懇話会		
開催日時		令和4年1月31日(月) 18:30~20:30		
開催場所		つくば市役所 本庁舎2階 防災会議室2		
事務局(担当課)		健康増進課		
出席者	委員	石井則久(茨城県つくば保健所長) 黒田勇二(なないろレディースクリニック理事長) 山本美和(つくば市議会議員) 間野聡子(市民委員)		
	報告者	濱田洋実(筑波大学附属病院つくば市バースセンター部長) 鈴木将貴(筑波大学病院総務部専門員) 海老坪正和(筑波大学病院総務部経営戦略課長)		
	事務局	小室部長、安首次長、木本課長、鈴木課長補佐、青木統括、 大山係長、坂本主事、助川主事		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	0人
非公開の場合はその理由				
議題		報告や実施状況についての意見交換等の定例の内容に加え、今後の寄附講座について、筑波大学附属病院からの分娩取扱実績報告等に基づき、寄附講座設置にかかる寄附金の効果とバースセンターの実施状況について検討する。		
会議録署名人	—	確定年月日	令和	年 月 日
会議次第	—			

<報告事項>

様式第 1 号

鈴木課長補佐	<p>只今より、令和 3 年度つくば市バースセンターに関する懇話会を開会いたします。皆様方におかれましては、お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。新型コロナウイルス感染対策として、途中一部 ZOOM ミーティングによるウェブ会議形式で開催いたします。ご協力のほどよろしくお願いいたします。</p> <p>本日進行を務めさせていただきます、健康増進課 鈴木と申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>議事録作成にあたり、本会議の発言内容につきましては、レコーディングをしております。あらかじめ、ご了承くださいませようよろしくお願い申し上げます。</p> <p>それでは、会議次第に従いまして進めさせていただきます。なお、本委員会はつくば市附属機関の会議及び懇談会等の公開に関する条例第 3 条に基づき、公開とさせていただきます。</p> <p>はじめに、保健部長の小室より、当懇話会の開催に当たりまして御挨拶を申し上げます。</p>
小室部長	<p>つくば市保健部長の小室でございます。本日はお忙しい中にもかかわらず、つくば市バースセンターに関する懇話会に御出席を賜りまして誠にありがとうございます。委員の皆様方におかれましては、日頃からつくば市の保健医療全般にわたりまして、御指導・ご協力を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。</p> <p>さて、平成 25 年 9 月につくば市バースセンターを開設して、早いもので 8 年が経過しました。つくば市バースセンターに関する懇話会は、筑波大学附属病院からの分娩取扱実績報告などに基づき、寄附講座設置に係る寄附金の効果とバースセンターの実施状況について検討するものです。バースセンターの増床が計画されており、本日はその進捗も報告される予定です。</p>

前回までの懇話会では、出席者の皆様からバースセンターに関する様々なご意見をいただき、つくば市では、バースセンターの認知度向上及び市民の利用促進を図るため、チラシや市報等を通して、市民への広報周知に努めてまいりました。過去5年間の出産数は年間110件ほどで推移していましたが、令和2年は年間138件と増加しました。これからも市民にとってバースセンターが身近なものとして、多くの方に利用していただけるよう引き続きの周知活動が必要と考えております。委員の皆様方には、忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

鈴木課長補佐

それではここで、本日ご参集いただきました皆様を御紹介したいと思います。お名前を読み上げますので、1人ずつ御挨拶をお願いいたします。

茨城県つくば保健所長 石井則久（イシイ ノリヒサ）様
、なないろレディースクリニック理事長 黒田勇二（クロダ ユウジ）様、つくば市議会議員 山本美和（ヤマモト ミワ）様、
市民委員 間野聡子（マノ サトコ）様

事務局紹介

つくば市保健部部長の小室です。

保健部次長の安曾です。

健康増進課課長の木本です。

統括保健師の青木です。

保健係長の大山です。

主事の坂本です。

主事の助川です。

	<p>課長補佐の鈴木でございます。</p> <p>それではこれから、議事進行に入りたいと思います。</p> <p>本日の座長ですが、つくば市バースセンターに関する懇話会開催要項第5条により、委員の互選により選出することになっております。立候補される方いらっしゃいますか。</p> <p>立候補される方がいらっしゃらないときには、事務局からご提案させていただいてもよろしいでしょうか。</p> <p>異議なしの声をいただきましたので、事務局から、座長を黒田委員にお願いしたいと思います。それでは、黒田委員よろしくお願いたします。</p>
黒田委員（座長）	<p>座長を仰せつかりました、黒田でございます。皆様のご協力により、円滑に会議を進めて参りたいと思います。よろしくお願いたします。</p>
木本課長	<p>では、意見交換に移ります。はじめに、市の出産環境に関する状況を御報告願います。</p> <p>はい。健康増進課の方から、市の出産状況について御報告をさせていただきます。</p> <p>まず、令和2年度のつくば市の妊娠届出数は2,251件となります。令和2年度の市内の医療機関の分娩取り扱い数が2,682件という形になっておりまして、うち市民の方が1,552件となっております。</p> <p>病床数につきましては、先ほど黒田先生からお話をいただきました、令和3年になないろもあバースクリニックを開設いただきましたので、10床増えたというような形になりまして、これまでの70床から、今現在は80床という形でございます。以上でござ</p>

様式第1号

黒田委員（座長）	います。 保健所で把握している、つくば保健所管内の出産の状況について教えてください。
石井委員	はい。石井から報告させていただきます。先ほども市の方からおっしゃったように、出産数、つくば市で生まれる方或いはつくば市の中で赤ちゃんを取り上げる方ということですが、現在の産科関係の施設ですが、先ほども紹介ありましたけれども、筑波学園病院があります。そして筑波大学附属病院、なないろレディースクリニック、なないろもあバースクリニック。そして病床設置済みの医療機関ということで、つくばみらいの方に1件、今年の9月頃に開院予定となっております。 この他にも、まだ情報の段階ですが、1件程度。つくば保健所管内。ですからつくば市、常総市、つくばみらい市、そこに1件ほど産科の医院ができるという案件があるようです。というところで、もあバースもできたということで、少しずつ産科のクリニックで赤ちゃんが生まれる環境という意味では、よくなりつつあると思います。以上です。
黒田委員（座長）	ありがとうございます。今の医療環境の状況を踏まえ、何かご意見ありますでしょうか。どうぞ。
山本委員	ありがとうございます。石井所長に伺いたいんですけども、つくばみらい市に1医療機関ということなのですが、これはこれからつくられる個人院だと思いますけれども、どのぐらいの病床数なのでしょうか。
石井委員	現在把握しているところだと、大体16床ぐらいですかね。そのくらいを考えているようでございます。つくばみらい市には産科のクリニックがありませんので、もしそこでオープンいただけ

様式第 1 号

	<p>るんだったら非常に嬉しいことだと思います。</p>
山本委員	<p>ありがとうございます。そうしますと、まあ個人院が増えても、15 から 20 床ぐらいの医院が多いということなのでしょうか。</p>
石井委員	<p>そうですね。やはり 19 床までがクリニックなので、このぐらいの病床数というところで考えていると思います。ですから、もあバースも 10 床ですね。もあバースも 10 床ですと、年間大体 200 から 250 ぐらいの出産数を取り扱うんじゃないかと思われま。大体そのくらいとを考えていただければ。</p>
山本委員	<p>それからもう一つ伺いたいんですが、つくばみらいとか常総、まあ常総よりつくばみらいでしょうが、若い世代も大変多く流入してきている昨今でございますけれども。つくば市とともにつくばみらい市は、どのぐらい出産数というのは変化しているのかわか、お分かりになりますでしょうか。</p>
石井委員	<p>そのデータはないんですけども、つくば管内でつくば医療圏の外に出る方が、大体年間 800 人ぐらい。或いはつくば医療圏の外からつくば管内のほうで産みに来る方が 1,100 人ぐらいということで、少し多めの数っていうんですかね。おそらく常総市の場合は、守谷とかがあるからそちらへちょっと流れるかもしれないけれども。大体つくばで生まれるのは 2,200 人ぐらいですね。その大体 800 人ぐらいが外に出ますということですけども、そのプラスアルファがつくば管内で出産を希望している方がいます。</p>
山本委員	<p>もしよろしければ、黒田先生とか石井所長も含めてなんですが、ずっと産科のお医者さんがなかなか誕生しないという、少ないということで、寄附講座もあって、何とか追い風を送りたいというように思っているわけなんですけども。この産科の医者っていうのは、今現状どんな感じなのだろうと。先生たちの肌</p>

黒田委員（座
長）

感覚で結構なんですけれども、お願いできますでしょうか。

はい。私どももバースセンターができた頃には、常勤が2名から3名しかいなかったんですけど、今は、4月にまた1人迎えて常勤6名、非常勤4名という体制をとっています。以前は私に対する負担がすごく掛かっていたんですけど、今は私も当直をしなくていいぐらい体制ができているというか、求人しなくても、私どものところに来ていただける方が増えたという状況で、そのためにもあバースも開設したんですが、新しく新規産婦人科を志す先生が、年間400から500、これ日本産婦人科の登録医が増えているんですが、分娩場所はどんどん減って行って集約化が図られているというのが現状で。私どもみたく個人のクリニックで医者を6人も7人も抱えているところは珍しくて、病院規模になっちゃうんですけど。私も昨年1,200件から1,250件お産がありまして、これも余剰ベッドがあればもう少しとれるんですけど、いかんせんクリニックですので、どうしても稼働をマックスに持ってきてもこれが限界で、これ以上増やすことは現実的にはできないんですけど。もあバースがその分もう少し要望を叶えることができるという感じで、あと筑波大も潤沢に10人ぐらいずつ新規入局者が増えているということで、今後、茨城県の産婦人科の人口はたぶん相当増加率が高いと思って、あと分娩場所が集約化されてきますので。

ただ、人口動態からみてもつくば市は茨城県の中で唯一まだ増えてたところなんですけど、赤ちゃんの出生数はこれからどんどん年間80万切ってくる世代になって、団塊ジュニアがお産を辞めてきたり結婚しなくなったりとかコロナで加速しちゃって、80万を切る世代が来るので、すると出生数が70万台、60万台っ

ていうのがたぶん今後10年間の間に来ると思います。つくば管内だけだとちょっと特異なんですけど、茨城県の他の地域では、今年に関してはどこも1割ぐらいお産を減らしているのが現状で、だからだんだん集約化を図る環境にあるのかなと。つくば地区だけちょっと特異的で、筑波大もありバースセンターもありという状況の中で、個人の開業が2つあるというのは、常総市やつくばみらい市にはまだ開設者にニーズに応えられるだけの要素があるし、あと地域のニーズもそれぐらい、需要がマッチしていると思うんですけど。

今後は、医者の中に働き方改革が導入されまして、個人クリニックって開業ができにくくなるというか。1人で開業して1人でやるっていう時代じゃなくなって、私どもくらいの規模を抱えないと個人ではやっていけないというのが現状で、私どもは現状をキープして頑張っていて、施設なんかも拡充しているという現状です。だからこの地域に関しては、医師不足とかそういうのは少ないんじゃないかなと私は思います。茨城県全域にすると話が別ですけど。過疎地域もありますので、そことは違うんですけど、つくば管内だけでいえば恵まれた環境であるし、今より分娩の難民がいなくなる環境では十分あると思います。

石井委員

私の方からは、私は産科じゃないのでそこまでは詳しくは分かりませんが、全体的に割と、筑波大学がやっぱり教育機関ですから医師を輩出しますし、黒田先生がおっしゃったように、ある程度の何科には何人というそういう枠が出てきちゃうので、おそらく産婦人科のほうでも、卒業生から産婦人科になる医者もある程度確保できていると。ただし大学ですから、NICUとか高度なテクニックがないと怖いということもありますから、それは

多少技術は必要だと思いますけれども。それもあって、つくば管内では黒田先生のところで診ていただいて、何かあったら筑波大に紹介できるシステムがちゃんとできている。

茨城県全体を見るとおそらく、産婦人科の医者がちょっと少ないかもしれませんけれども。赤ちゃんが生まれる数はどんどん減っていますから、つくばだけはもう数年はなんとか多いかもしれませんけれども、つくばも数年経ったら赤ちゃんの生まれる数がどんどん減っていくと思うんですね。それ以上は、おそらく産婦人科の医者が増えるというのは、働き方改革で各診療所でも医者の数を増やさなきゃいけないですから、そのためにはまだまだ産婦人科の医者が足りないと思いますけれども、大体もうそろそろよろしいかなっていう。

あと毎年毎年、若い先生が入っていただいて、高齢の先生もいらっしゃいますがそれはリタイアして、そのへんの循環で行く可能性があるんですね。また、やはりどうしても赤ちゃんが少なくなってくるということで、産科がかなり少しずつ縮小されていくのかもしれないし、あと働き方改革って先ほど黒田先生が言ったように、1人の医者で開業するという時代ではなくなりつつあると。ですから最低5人程度ぐらいの産科の医者がいて、そこでクリニックをやるというような形になっていくと思いますね。筑波学園病院には常勤の先生がいらっしゃると。あと大学はいるとして、なないろもいるというところで、あと個人の病院で今後どうやって産科の医者を増やしていくかということですね。まあ東京に近いですから、東京の大学を卒業した先生が茨城に来ることもできますし、特に茨城の南部の方は東京から1時間ぐらいで来られる距離というのもありまして、医者が来やすいという状況も

山本委員	<p>あり、今後産科の医者が少なくて困るという事態はそれほどないのではないかなと考えております。</p> <p>詳しくありがとうございます。もう1つ間野さんに聞きたいんですけども、ここ最近のママさんたち。出産のことで、どんな感じと言っているのでしょうか。ちょっと前は、とにかく産めるところがないと、お産難民という感じがすごく強かったんですけども、最近はどんな感じで皆さんおっしゃっているか、教えていただけますでしょうか。</p>
間野委員	<p>そうですね。まずはコロナのおかげで、もう非常に出産場所を探して、その後に里帰りするにも、2週間とか場合によっては1月とかしばらく人と会わないようにとか、おうちとにかく隔離状態で待機をして何も症状が出なければ入院できますとか、そういった条件がすごく厳しくなっているという話ですとか。あと面会とかもダメになっちゃっているんで、とにかく出産が非常に孤独で、自分1人でずっとやっていかなきゃならない。なので、病院によるのかもしれないんですけども、ZOOMみたいなオンラインとかテレビ電話みたいなので面会ができるとか、そういった工夫をされているところもあるとは聞くんですが、そういうのができないところがまだまだ多くて、例えば赤ちゃんの顔を見せられないというような、そういった話は非常に多く聞いています。あとはつくば市なので、転入転出が非常に多くて。コロナの中でその状況で産んで、しかも出産の前後で転入転出するっていうお話も多く聞くので、どこにどういうふうに頼っていいのかも分からないとか、生まれた後もそうですし、生まれる前にこちらに来て、どこで産めばいいんだから始まってというのも聞きますし、情報をどこから取ればいいのかっていうのも、来たばかりだとど</p>

うしたらいいのかというところで、コロナの影響がとても大きい
んですけれども。コロナでなくても転入転出がやっぱり非常に多
いので、まずは情報集めをどこからすればいいのか。例えば市役
所に転入の手続きに来たときとかに、もうちょっと情報をいただ
いたらいいのについていうのとか。例えば病院とかでもうちょっと
いろいろお話を、母親学級とかそういったものも全部コロナでな
くなって中止になってしまったり、情報が貰える機会自体が非常
に減っていると聞くので、お母さんたちはそういった情報につい
て非常に知りたいということをおっしゃっています。

山本委員

ありがとうございます。私の聞こえてくる中では、以前よりは
お産難民じゃないんですけれども、産めないというふうに言っ
ている方は少ないのかなと思って。黒田先生が頑張ってくださ
っているので、本当にないろに駆け込んでというところだと思いま
すし、また筑波大の出産も非常に認知され始めているので、皆さ
ん安心して2回目、3回目というような形で筑波大を希望される
方、バースセンターを希望される方も増えているというふうに感
じているんですね。

なぜこのへんを聞かせていただいたかと申し上げますと、やは
りこのバースセンター、つくば市として寄附講座というような形
でお金を繰り出して、それでずっとこの10年やってきておりま
す。それが令和5年まで目一杯やると10年になるわけですがけれ
ども、10年で4億を超えるお金が実は出ておりまして。筑波大のベ
ッド数がなかなか増えないままここまで来て、この後状況をよく
伺って、いよいよ増床というところまで来たわけなんですけれど
も。この間けっこう長かったなという感触もございまして、その
間に黒田先生が本当に頑張ってくださったり、いろいろなところ

で周りにも少しずつ増えてたりということで、大きく環境も変わりつつあるという中なんですね。もちろん出産数も多いので、市として応援はし続けなければいけないという半面、やっぱりこの10年というところで、1つこの事業としての総括をしながら、その後はどういう形がいいのかというのが、議会でも若干課題に思っているところがございまして。今日せっかくこの懇話会に出ただいたので、私も専門家の皆さんのご意見を伺いながら、議会としても、この後の予算繰りの方向性を少し検討できたらいいなというふうに思っております、発言させていただいたところです。やっぱりこの4億って大きなお金ですので、このまま筑波大頼みでお金を捻出することが、産科事情を良くしていくならば、やはりまだ継続ということも考えなければいけませんし、このまま寄附講座という形がいいのかどうかも含めて、何か皆様のご意見伺わせていただけたらありがたいんですけども。

黒田委員（座長）

何か、ご意見ありますでしょうか。

間野委員

すいません。さっき、少し話題がずれてしまったかもしれない。バースセンターについてなんですけれども、前回もこちらの懇話会に参加させていただいたときにもお伝えしたと思うんですが、私のいろいろな子育て支援の活動の中で、お母さんの話を聞くんですけども、バースセンターで産みましたっていうお母さんに私は出会ったことがなくて。やはりお産の件数としては、バースセンターでというところは非常に少ないのかなというところは思っています。逆に、バースセンターで産むってできるんですかと聞かれることはあって、2人目とかだったらいいかなあとか聞いたりするのですが、ちらほらと噂話は皆さんお聞きになって

	<p>いて、それを聞く限り、非常に条件が厳しいと。バースセンターで産みたいんだけどもちょっとでも異常というか検査値が何か引っ掛かったとかになってしまうと、もうそこから外れてしまっ てというお話も聞くので、それで外れちゃってという話は何回か 聞いていて、噂ではなく産みたかったけどダメだったんですとい う話は何人かから聞いています。</p> <p>なので、こちらで少し伺いたかったのは、どれだけ条件が厳し いのだろうというような、お母さんたちにしてみれば非常にこう、 いろいろな興味があるところではあって、先ほど山本議員もおつ しゃっていたとおり、情報は聞く機会が出てきていると思うんで す。バースセンターっていうところがあるよという。けれども、 そこで産みたいけどどうしたら大丈夫なのということなんですけ ど、実際がどういうものなのかというのが、私もですし、お母さ んたちもよく知らないというところがあるのかなと思いますの で、そのあたりを今日聞けたらお聞きして、お母さんたちにきち んと正しい、実際の状況を伝えていきたいなと思っています。以 上です。</p>
黒田委員（座 長）	<p>ありますでしょうか。どうぞ。</p>
石井委員	<p>私の手元にあるもので言いますと、大学附属病院ですと、産科 一般病床が26床で、MFICU・NICU・GCUなどが9床9床18床とい うことで、一般の26床がこれバースセンターということいいん ですか。</p>
木本課長	<p>つくば市バースセンターは、今のところ6床というような形に なります。</p>
石井委員	<p>そうするとたぶん、一般の26床の中に含まれていると。</p>

様式第1号

木本課長	はい、含まれているという形かと思います。
石井委員	なるほど。そこは普通、バースセンターですから普通のお産も扱っていることになっているということですか。要するに、妊婦の方がここで産みたいからということで大学病院に行くと、じゃあどうぞと案内している感じなんですか。
木本課長	そうですね、詳しくはこの後、大学病院さんのほうに確認していただければと思うんですけども。基本的には、そのバースセンターを希望している方がバースセンターで産むと。そこで先ほど間野さんからお話あったように、ちょっと異常があった形だとバースセンターではなく、筑波大の産科の方に移されて産むというような形になりますので、今回の中身の26床、その内訳の中では一般病床数と、バースセンターが一緒になっている形と思われます。
黒田委員（座長）	バースセンターの位置づけ、私は詳しくは分からないんですけど、院内助産院みたいな感じで助産師の管理でできる。だから助産師ガイドラインが大学の中であって、高齢とか、あと体重増加、妊娠高血圧とか、そういうような条件に入っちゃうと医師の管理っていうふうになっちゃうんじゃないかと思って。私の方でも、私のところで分娩予約いっぱい取って、バースセンターって外から見えないので、大学にまず紹介して、その方の意思で条件クリアしていたらバースセンターで管理するって形になるようなので。たぶんこれは院内助産院みたいな感じで医療管理がいらぬよという、けっこう厳格な助産師ガイドラインというのが出ているんですけど、そういうのに準じているんじゃないかなと思うので。大学は特に高度周産期、全県下高度周産期も兼ねているので、私のところでも、週数早い段階で異常があった方は全部大学にお

	<p>願っているという現状ですので。大学の分娩総数の中に占める割合、まあ普通分娩の方が少ないかなと思うんで、バースセンターで産む方はその中でも100件くらいになっちゃうのかもしれない。実態は分かりませんが、僕も毎年グラフを見て、そういう現状なのかなと思います。</p>
山本委員	<p>そうですね。実は、なないろもあバースが10床で稼働されたということが非常に衝撃的でした。やはり8年、10年かけて、かなり大きな額を筑波大に投入をしていたにもかかわらず6床から増えずに、本来12床まで増やす予定だったものが、まだ現時点で現実にはベッドが開業されてないっていう状態になっている中で、民間の方がこのように努力をされて、一気に10床を増やして下さったという。ここに公費を投入して、かたやなかなか成果が出ず、まあベッド数だけではないとは思いますが、かたや本当に民間の力で努力をしてくださってベッド数を開いてくださっているという中で、ここにどういう後継支援っていうか、あるのかなっていうことを考えると、いろいろな角度からちょっと考え直していかないといけないときにきているのかなと思いましたので、ちょっと問題提起させていただいて、またこの後の筑波大の報告も聞いてみたいなと思っております。</p>
黒田委員（座長）	<p>ありがとうございました。私どもも患者さんを6週、7週でいつも交代していて、何とかならないかなと思って。私どもでもバースセンターをつくりたいという形でやって、非常に今、産後ケアもすぐに予約でいっぱいなる状態で、そういうニーズに応えたいっていう助産師やスタッフは、私のところに結構いましたので、これは私がもう、経営ベースでいうと全然採算が合わないんですけど、今、山本先生に言われたように少し勇気を持ちました。全</p>

つくば市バースセンターにおける分娩数の推移ということでグラフを作っております。昨年はちょっとお産が少なくて、大学病院全体のお産も10数%、15%くらい下がったのかな。13%ぐらいか、減っているんで、里帰りが激減しましたので、あとコロナで日本全体でお産が減っていますので、こんなものかなとこちらは思っています。

2枚目の、バースセンターで分娩した女性の住所地というやつですが、つくば市に実家があって里帰りする方が一定の数いらっしゃって、里帰りでいらっしゃる方の場合はその実家の住所地を示すという形で、これはこの数年ずっとつくば市民の割合はこのぐらいの割合で推移しています。

次に、資料2は、バースセンターっていうのはつくば市の寄附講座の臨床面、病院の診療面のことなんですけれども、それだけをやっているわけではなくて、将来つくば市で働く産科医であるとか助産師であるとかの育成というのも大きな仕事なので、それについて教育ですね、どういうことをやったりしているというのを、報告書として昨年の4月にまとめさせていただいたものが出ています。2ページ以降は研究で、本日の懇話会とはあまり馴染まない内容なんですけれども、大学として研究をやっていますので、こういう研究が、すぐではないですが遠い将来、つくば市での産科の医療レベルの上昇とかそういうのに寄与できればいいなというふうに考えております。

簡単ですけどもこんなところで、何かご質問があればお受けいたしますが。

黒田委員（座長）

質問は大丈夫でしょうか。ありがとうございました。

それでは、つくば市バースセンター施設整備の進捗状況について

鈴木専門員

て、筑波大学附属病院 鈴木さんからご説明願います。

はい。では、資料3で報告させていただきます。

まず1番としまして場所的には、附属病院のB棟6階で整備をしております。2番にございますけど整備内容につきましては、病床数につきましては、寄附講座協定書にも書いてございますように12床で考えております。両括弧にございますように、当然、病室だけではございませんので、ナースステーション含めた諸室、待合室等々を一緒に整備すると。その面積については、約2,000平米というふうに考えております。

3番の供用開始時期でございますが、現時点におきましては、令和5年の7月でございます。また、*にございますように、現時点における供用開始時期でございますので、現在コロナ等で資材等が入ってくるのかどうかということもございますので、場合によりましては開始時期が延伸、特に前倒しはないと思いますので、後に遅れる可能性もなきにしもあらずというところでございます。

4番の供用開始に向けた行程でございますが、工事自体は令和元年6月に業者が大林組に決定しまして、同年7月に契約を締結しまして、一昨年9月に請負契約を締結いたしまして、10月から改修が始まっているところでございます。

5番として参考情報でございますが、バースセンター自体は自然分娩病棟でございますが、当然自然分娩と言いながらも何が起こるか分かりませんので、併せまして、けやき棟5階にございますNICUとGCUを6床ずつ増床いたしまして、バースセンターの下、5階の方に移転拡充ということで、NICUが現在の9床からプラス6床の15床、GCUについては18床からプラス6

黒田委員（座長）	<p>床の 24 床で整備する予定でございます。</p> <p>次のページをご覧くださいますと、けやき棟の北側にこのオレンジでハッチングしました B 棟がございまして、次に B 棟 6 階、この中ではこの赤で囲んだエリアのところをバースセンターということで整備を進めているところでございます。</p> <p>以上でございます。</p>
大山係長	<p>ありがとうございました。続いて、市民アンケートの赤ちゃん訪問の調査結果について、事務局から説明を願います。</p> <p>では、健康増進課の方から、市民アンケートの調査について報告させていただきます。お手元の資料 4 をご覧ください。こちらの資料調査ですが、出産環境に関する状況把握のために、赤ちゃん訪問の時にアンケートを実施しております。</p> <p>調査期間は令和 2 年 4 月 1 日から令和 3 年 3 月 31 日までの 12 か月分の集計結果となります。</p> <p>調査対象は、つくば市で行ったあかちゃん訪問時につくば市に住民票のある、あかちゃんを持つお母さんで、お母さん自身に記入をさせていただいております。</p> <p>配布枚数は 2,232 枚とありますが、こちらはあかちゃん訪問の実施数になります。外国人の方ですとか、コロナの影響で赤ちゃんの顔だけ確認させていただいて、資料をポスティングしたり、相談指導は現場で行ったような方には、アンケートは実施しておりません。そのため、回収枚数は 1,933 枚、回収率は 86.6%となっております。</p> <p>また、全員が全部の質問に回答いただいているわけではありませぬので、回収枚数と、それぞれの質問の回答の合計とは異なるということがあります。</p>

それでは、2つ目の表をご覧ください。出産した医療機関の場所になりますが、市内で1,133件。市外の方で443件。県外で248件。大体64%の方が市内で出産している状況になります。

次に、3つ目の四角で、出産した市内の医療機関の内訳です。つくば市バースセンターで86人。筑波大学附属病院の産科で285人。筑波学園病院で170人。なないろレディースクリニックで683人という結果でした。出産したお母さん方に記載していただいておりますので、バースセンターで出産した方が筑波大学附属病院産科というふうに回答した方もいらっしゃるようです。母子健康手帳の出産状況記載欄の方に、どうしても筑波大学附属病院というふうな記載がある方は、大いに見受けられるので、産婦さんもどちらで産んだのかが、出産後ちょっと時間が経ってからの訪問になりますので、不明だということも考えられると思っております。

続きまして次の四角、一番下ですが、こちらは市内・県外での医療機関で出産したという理由になります。里帰り出産が347人。市内で予約が取れなかったという方が64人。評判がよかったという理由では58人。自宅から近いという方が42人。その他の理由で162人ということになります。その他の理由が裏の方に書いてありますが、もともと市外・県外の医療機関で出産する予定だったという理由の方も多くいらっしゃるようです。

以上でアンケートの結果報告を終わります。

黒田委員（座長）

ただいまの説明内容について、ご意見や質問等ありましたら、お願いいたします。

石井委員

つくば保健所の石井ですけども、バースセンターについてですが、教育とか研究等をやっておられるということなんですけども、

	<p>おそらく年間 4,000 万円近くの寄附があるということなんで、つくば市民としては、つくば市の中に産科の先生が増えてくれる。そうすることによって、お産が楽になる。そういうふうに考えると思うんですけども、実際大学ですから、県内、まあ全国もありますけど茨城県内の産科の医者を増やすというのも重要なことだと思いますので、どうも、つくば市だけがかなり負担するというのも微妙な感じがあるかなと思って。茨城県として、寄附とかするといいいのかなと思ったりもしますし。あと、例えば助産師の教育とかということもありますけども、おそらく医師の場合はつくば市以外にも選ばれるかと思いますが、助産師についてはどうなんですかね、つくば市で就職してくれる人が多いんでしょうか。</p>
<p>黒田委員（座長）</p>	<p>濱田先生、どうでしょうか。</p>
<p>濱田先生</p>	<p>この参考資料の最終ページに出ておりますが、毎年、我々が教育した助産師がどこで、卒業後最初の勤務地ですけれども、書いてあって、割と市内というか筑波大が多いですけれども、その表のような数になっています。</p>
<p>黒田委員（座長）</p>	<p>石井先生、どうでしょうか。大丈夫でしょうか。</p>
<p>石井委員</p>	<p>はい、ありがとうございます。参考資料のところですね。3ページ目ということですけども、すいません。やっぱり大学が多いということで、たぶんバースセンターで働いている方も多いのかなというふうに思いました。あとやっぱり出産の数がバースセンターや大学が思ったより少ないと言ったら語弊があるかもしれませんが、やはり開業の先生の方が行きやすいというものもあるかもしれませんが、今後 12 床にバースセンターが拡張される</p>

様式第1号

	<p>と、出産の取り扱いももっと増えるという形でもよろしいのでしょうか。</p>
濱田先生	一応、それを期待しています。
黒田委員（座長）	その他、ご意見ありましたら。
山本委員	<p>市議会議員の山本美和でございます。今日はありがとうございます。今、石井所長からも、医師の育成についてご質問ございましたけれども、この表を見させていただきますと、この8年ぐらいで60人の産婦人科医を輩出されているということなのですが、今、産婦人科医というのは、なり手というのは現状、まあ学生さんの意向ですけれども、どんな状況になってらっしゃるのか。一時は産婦人科医になりたいという学生さんが少ないというような状況があったと思いますけれども、現在はどのような感じなのでしょうか。</p>
濱田先生	<p>はい。今も少ないです。</p> <p>この参考資料の最後のページに数字が書いてあるんですけども、別に自慢するわけじゃないんですけども、とてつもなく多くて、筑波大は何かやっているんじゃないかっていろんな問い合わせが来るぐらい多いです。例えば、令和2年は14名入っているんですけども、この年の京都府の全体。京都大学とか京都府立医科大学とかそのほか国立京都の病院とか全部の病院で、新しく入った産婦人科医が10名しかいなかったのも、京都全体よりもうちの大学の方が多いということで、ちょっと我々の学会とかで話題になって、いろんな人から電話かかってきてというような感じで、おかげさまで多いです。</p> <p>多い理由として、学生時代、筑波大卒業生なんかは、バースセ</p>

	<p>ンターのことを教えていますから、バースセンターがあつてそういうような先進的にやっているところに行って、助産師や産婦人科医になりたいということで、茨城とは縁もゆかりもない人間も毎年1人2人入ってきたりもするぐらいになっているので、その点は今日お集まりの方々にすごく感謝しているというところではあります。ただ日本全体としては、もう話題性がなくなっちゃったのであんまりマスコミに出ませんけれども、相変わらず産婦人科の医者になりたいという人間は非常に少ないのが現状です。</p>
山本委員	<p>以上です。</p> <p>ありがとうございます。現状としては、筑波大としては増えてはきているものの、全体としてはなり手は少ないということなのですが、併せて、いわゆる出産数というものも、少子化でございますので、これから先あまり見込めないというふうに思うのですが、このあたりいつごろ追いつくというか、産婦人科医と出生数というのが均衡を保てるようになるのは、あとどのぐらい先だと思われますか。すごい難しい話かもしれないんですけども。</p>
濱田先生	<p>産婦人科の医者の勤めはお産をやるだけではないので。産後のケアもそうですし、妊娠中の管理もそうですし、昔に比べて1人1人の患者さんに要求される医療レベルがどんどん上がっているもので、今のままいくと多分追いつかないんじゃないかなというふうには思っています。</p> <p>出産数は、単純にはコロナの影響があるので去年、非常に減りましたがけれども、どうも患者さんと話をしていると、コロナが収まると結構盛り返しそうなところもあるので、そうするとともにとの予想通りの少子化というペースで進んでいくとは思いますがけれども、ある程度遠い10年20年というスパンにならないと、</p>

山本委員	<p>あと何か起きないと、産婦人科の医者が十分足りるっていう時代はもう来ないかなあというふうには、個人的には思っています。以上です。</p> <p>ありがとうございます。筑波大でバースセンターなり、寄附講座などを活用して、学生さんが集まって来やすいというお話でしたけれども、毎年つくば市として4,200万の寄附講座に対してのお金を繰り返させていただいているんですが、この4,200万は、どんな感じで筑波大としては、この上にピックアップして、講座を運営されていらっしゃるのか、この4,200万の使い方というのを少し何か、教えていただけないでしょうか。</p>
鈴木専門員	<p>はい。鈴木の方から説明させていただきます。</p> <p>この参考資料の2ページをご覧くださいますと、そもそもこの寄附講座を作るときに、4,200万というお金は、医師3名の人件費でございます。この人件費をいただいたことによって、医師を当然増やしましたので、この2ページでございますように、平成20年当時に720だった分娩件数がですね。</p> <p>このとき記者会見の時にも、バースセンターができたかどうかくらい増えますかとお質問いただきまして、その当時は病床数を増やすわけではないので100から200ぐらいかなという話でございましたが、現実的には、昨年度が令和3年はコロナがあるので別ですけども、1,050 まあ 1,020 近くまで増えてきているところでございますので、医師の増員によってまさしく、ここまでの件数を受け入れられていることとなります。</p> <p>以上です。</p>
山本委員	<p>ありがとうございます。</p> <p>続いて、本日新たに整備される図面とか、詳細について見させ</p>

	<p>ていただいたんですけども、これから建築にかけて、つくば市としては3億応援させていただくことになっていると思うんですが、これらというのは一部を負担することになっていると思うんですけども、建設的なこの計画の概要について教えていただけないでしょうか。</p>
鈴木専門員	<p>ご質問の件ですけれども、今、病院建築の場合は、大体平米30万以上かかります。改修で、です。先ほど申しあげましたように2,000平米ですので、単純計算しますと6億から7億かかります。その一部に、今3億円というお話が出ましたけど、それを充てさせていただければなというふうに思っているところでございます。</p> <p>以上です。</p>
山本委員	<p>ありがとうございます。</p> <p>あと私、このバースセンターの懇話会の委員設置当初に委員を務めさせていただいた後、かなり時間経過しまして、久々に再度委員に入らせていただきまして、久しぶりにこちらに来させていただいたところなんですけれども、この12床がなかなか進まなかったんですが、この辺りっていうのは、それだけ大きな改修に併せてというようなお話からだったというふうには記憶はしているんですけども。つくば市としては、ベッド数を確保していただくというのが一番大きな目的であったところもございましたので、かなり遅れてしまったというのはどういった事情からなのか、お教えいただいてもよろしいでしょうか。</p>
鈴木専門員	<p>はい。ただいまのご質問でございますが、もともとはB棟のところで、平成27年の10月に12床で整備予定という予定でございました。ただ実際は、その整備にあたって中を見た時に、やはりそもそも古い建物だったので、そうではなくて新築にしようとい</p>

	<p>う話になりました。それで、新築しようと思ったんですが、他県の災害等で資材が一気に高騰したということもございまして、またその新築から既存棟の中で、居ながら改修することによって、新築と同様の免震を導入することができる技術工法も開発されましたので、それにシフトをしたことによって、今にきたというところでございます。ですので、ここまでの遅れにつきましては、市の方々に予定から大幅に遅れたところでご迷惑おかけしましたが、中にいる我々自体も、遅れることについては想定外だったというところでございます。以上でございます。</p>
山本委員	ありがとうございます。
黒田委員（座長）	その他、皆様からご意見、ご質問等はございませんでしょうか。間野委員どうぞ。
間野委員	<p>市民委員の間野です。よろしく申し上げます。</p> <p>今報告があった内容で確認させていただきたいんですけど、1つが、医師のなり手が増えている理由が、バースセンターもあって先進の医療とかを学べるからという話があったんですが、バースセンターは、自分的には、確か助産師さんが対応をされるとお聞きしたんですけれども。先生方がバースセンターにどういうふうな関わりというか、もちろん関わりはあると思うんですけれども、どういった関わりになっているのかをお聞きしたいのが1点。</p> <p>あとは、先ほどのアンケートの内容について、出産費用を抑えたかったためというのが書いてあるんですけれども、私もつくば市内のお産は他と比べてお金が結構かかって高いというのをお母さんから聞いたことがありまして、バースセンターの場合と大学病院の場合でどれくらい費用の差ができてくるのか。いろいろな状況はもちろん関わってくると思うので、ざっくりで構わないん</p>

	<p>ですけれども、どのくらいの差があるのか、もしよろしければなないろさんも、やはり2か所あるので、それぞれ金額の差を、大体普通で大きな問題がなければ、どれくらいの出産費用がかかるのかというところを改めて確認させていただけたらと思います。</p> <p>よろしく願いいたします。</p>
黒田委員（座長）	<p>バースセンターの方からお答えいただいてよろしいでしょうか。</p>
濱田先生	<p>すいません。音声悪くて質問がちょっと全くわからなかったもので、もう一度お願いできますか。</p>
間野委員	<p>すいません、声が小さかったでしょうか。ごめんなさい。これだと聞こえますか。失礼しました、もう一度お願いします。</p> <p>1つ目が、筑波大の産科の先生が増えているというお話で、その理由として、バースセンターがあって先端のいろいろなものが学べるからという理由もあるというお話がさっきあったんですけども、バースセンターは、基本的には助産師さんが主に関わって出産する、リスクがないお母さんの出産場所とお聞きしたので、お医者さんがどういう形で関わっているのか、どういったところの学びをバースセンターでされているのか、そこをちょっとお聞きしたいなというのが1つ。</p> <p>あとは、先ほどの資料の4番のアンケート調査のところ、いろいろなその他の意見で、市外・県外の医療機関で出産した理由のその他の中に、出産費用を抑えたかったというのがあるんですけども、これは私も子育て支援の場で、他のお母さん方からつくば市は出産の費用が高いと伺ったことがありまして、いろいろな状況があるので一概には言えないとは思いますが、普通に分娩をされた場合に、大学病院で産む場合とバースセンターで産む</p>

場合でどれぐらいの差があるのか。あとどんな違いがあるのか。あと、同じようにならないろさんの方でも2か所ありますので、それぞれの大体の出産にかかる費用、あとその差額を確認をさせていただきたいのですがよろしいでしょうか。お願いします。

濱田先生

1つ目のご質問ですけれども、実際に患者さんのそばで寄り添って行くのは助産師なんですけれども、本当に医学的な管理が不要なのかというところのチェックだとか、そういう新しいというか、新しいっていうんじゃないですね、まあ昔は日本は産婆さんみたいなそういう世界もあったので、そういうお産の形式というのは、現在の産婦人科学を学んでいる学生にとってみると逆に新鮮だったりするので、そういうところの管理に携われるっていうのが、興味を持って産婦人科になりたいと思う学生が多いんじゃないかというふうに思っています。

実際にはすべてのバースセンターを希望する患者さんに、本当に危なくない、リスクがないのかという判定は我々がやっていますし、妊娠中も何回か診させてもらって大丈夫ということを確認して、お産が始まった段階でも、大丈夫だということを確認してというのを裏でやっていて、患者さん自身はあんまり実際自分たちがそういうチェックを受けているという実感はないのかもしれないですけれども、そういう形で関わっているというところになるかと思います。毎週1回バースセンターの患者さんについては、医者と助産師で月曜日がミーティングの日で、今日も先ほどやっていたんですけれども、ミーティングをやって。お産っていうのはやっぱり年に日本で40から50人は亡くなられているので、間違いが起こると、何かが起こると死んでしまうという状況ですから、そういう状況をゼロにしなきゃいけないということで、関わ

	<p>っているというような言い方もできるかもしれないです。</p> <p>2つ目のご質問の費用については、うちはバースセンターのお産も、普通の医者が基本的に管理するというか、医者が管理すると言っても助産師が相当関わっているんですけども、その2つで費用の差はつけていません。</p> <p>以上です。</p>
黒田委員（座長）	<p>なないろレディースについては、茨城県の他の地域から比べると、確かにつくば地域の出産費用は、私どもにおきましても高いなあというのはあるんですけど、いろいろ設備として人件費等を考えまして、出産一時金プラス20何万か分からないんですけど、70万近く普通分娩でかかるかと思います。処置とかも入るとまたかかるんですけど。もあバースの方は新設で開業しましたので、助産師主導と言うイメージでやっていますので、こちらは分娩費用等含めて実質5万円以上たぶん安いと思うんですけど、やっている内容はもっと手厚くて、産後ケアも含めて非常にやってるんで、患者さんに（聞き取れず）をあげるために、人件費からいうと全然、当院では採算も全然合っていないんですけど。普通にやるとたぶんそれぐらいの費用になっちゃうかなと思います。だから他のところは、水戸とか全国の方から比べると、確かにつくば地区は10万から20万ぐらい高いと思いますし、東京の方から比べると、逆に言えば10万から20万安いっていう状況があるんですけど。逆に言えばつくばのエリアで、この価格設定で何とか維持できてるっていうのが現状なので、適正価格っていうのは分かりませんが、そういった形でやっています。</p>
間野委員	<p>ありがとうございました。</p> <p>もう1つバースセンターの方で伺いたいんですけども、前回</p>

もお伝えしていたと思うんですが、今、数字もありましたけれども、年間に80何件のバースセンターでのお産があるということなのですが。やはり子育て支援はしているんですけども、バースセンターで産みましたというお母さんと、残念ながらお会いしたことが私はなくて。それと別で聞くのが、バースセンターで産みたかったんだけども、いろいろ条件というかリスクが出てきてしまったり、検査で引っかかったりとかで、結局産めませんでしたというお話は何人かから聞いたことがあります。で、すごく狭き門という噂がお母さんの間では、結構バースセンターについては広がっているという印象を持っているんですけども。リスクがあるないというところは、今お話聞いたら、バースセンターに入られてても、先生方がよく診てそういったチェックがちゃんとされているというお話でしたし、助産師さんが主導ということであっても、もちろん医師もちゃんと入っているということだったので、もうそこまで狭き門にしなくても、逆にいいんじゃないかって私としては思ってしまったんですが、バースセンターで診る方と、そうじゃない方との線引きというか、その辺りはどのような基準で、どうされているのかを聞きたいです。

濱田先生

はい。ご存知かと思いますが、日本看護協会だとか日本助産学会とかがガイドラインを出していて、助産師はこういう患者さんを院内助産でやっては駄目ですよというのがありまして、それを厳守しているだけなので。

例えば、妊娠して10キロも15キロも太った人がバースセンターで産みたいと言われても、やっぱりそれはちょっと危なくて認められないので、そういうガイドラインになっていますので、それ以上でもそれ以下でもないと言いか言いがいいんですが。

例えばうちなんかで、去年でも最初は130人か140人ぐらいバースセンターで出産希望されているんですけども、そのうち最初にちょっとあなたは無理ですと言ってお断りしたり、途中で今妊娠糖尿という病気になる人が10%ぐらいいますから、妊娠糖尿病になってしまえば、バースセンターからは外させていただきますし、血圧が上がっても外しますし。いろいろな病気が妊娠中半年の間にいろいろ出てくることは十分ありますから。こういう形で最終的に残って、もちろん赤ちゃんも順調に育って、この80何人で赤ちゃんが正常より小さかったというような患者さんは1人もいませんから、赤ちゃんもちゃんと育ってと行った、そういうチェックを助産師がやり、医者もやりっていう形で、最終的にこの数になってしまったというような形だと思います。

間野委員

何度もすみません。そうすると、大学病院での出産件数として、バースセンターでの出産件数が、そういう意味ではちょっと少ないというか、普通の病床に行って、年間の分娩数としてはちょっと少なめなのかなと思うんですけども。

バースセンターとして助産院が院内助産院みたいな形で助産師さんが多く診るという形だと思うのですが、でもお話を伺っていると、先生方も必ず確認はされるっていうことでしたので、助産院とかだと普通はこのもちろん異常があれば病院に行ってくださいっていう紹介になると思うんですけども、それがなければ、そのまま助産院ですずっと妊婦さんを見つけて、そのまま出産になるんだと思うんです。で、そこまでは助産師さんだけじゃなくて、大学病院なので先生もご覧になっている、あとは研修の先生方もいらっしゃると思うので、勉強の意味で先生方がご覧になっているというのもあるのかなとは思いますが、すみません。あの、

濱田先生

わざわざバースセンターにしなくても、ちょっと失礼かもしれないですけど、どちらにしても先生方の確認をされているのであれば、何かそこで制限をかけちゃうというか、バースセンターではなくて普通の大学病院って診るという形と、わざわざなぜ分けているのかなというのが、疑問に思ったんですけども。

直接関わっているのはすごく、医者は外来で2回ぐらい診るだけで外来も診ませんし、患者さんと直接関わっているわけじゃないですけども、毎週毎週助産師から報告を受けて、どういう状況かというのを確認しているというような形の関わり方なので。

一方、普通の管理は、外来は10何回全部医者が診ますし、お産を全部医者が担当して、それに助産師が関わってくるということで、どちらも両方関わるので、どちらが主体っていうか、患者さんにとって自分のすぐそばにいてくれるのはどちらかっていうそういう問題なんですけど、先ほどバースセンターで産みたかったのに産めなかったという方のお話がありましたけれども、そういう方々が産みたかった理由というのが、近くに助産師がいてくれる方が安心でというような理由なので、そこに院内助産の存在意義があると思うんですけども、いかがですかね。

間野委員

ありがとうございます。すいません。お母さんたちがそのバースセンターで産みたかったっていう意味がどこにあるのかを私もちゃんと聞いていないので、そういった理由だったのかどうかまではちょっと分からないんですけども。ただ、今は産科の病棟も綺麗になっているのかな、ちょっと現状がよくは分からないのですが、バースセンターの方が設備も綺麗で、いろいろな意味で非常にこう、至れり尽くせりというかケアがいいというのが、情報としてお母さん達ご存じみたいなので、そういったケアを受け

	<p>たかったというところが、大きな理由かなと思うんですが、それがたぶん今先生がおっしゃっていた、助産師さんが主に関わって産後ケアとかそういったものも含まれるというお話でしたので、確かにそこはそういうことなのかなって、今答えを聞いて思いました。ありがとうございました。</p>
黒田委員（座長）	<p>他、ありますでしょうか。</p> <p>意見交換がですね、その他として何かありましたらご発言お願いいたします。間野委員、どうぞ。</p>
間野委員	<p>ちょっとすいません。バースセンターのだけではなくて、つくば市のお産について、つくば市とも限らないんですけど、お母さんたちの声を少し私の方で伺って気になったことがいくつかあったので、こちらを共有できたらと思って発言させていただきます。</p> <p>まず、先ほどあった出産費用が安くないのかっていうのは、つくば市はやっぱ高いよねっていうお話は結構聞きます。</p> <p>あとは、無痛分娩ができる場所を増やしてほしいという話があったのですが、なないろさんではされてるというのを聞いたんですけども、筑波大病院ではそういった扱いというのはあるんでしょうか。後ほど伺えたらと思うんですけども。</p> <p>あとは、コロナの影響で仕方がない部分もあるんですが、立ち合いができる後は、生まれた後に一緒に泊まっていられるような場所を増やして欲しいというお話。あとは、産後の家事育児の手伝いや、お母さんのちょっと休めるショートステイができるような施設を増やして欲しいというお話もありました。これもいろいろ病院やクリニックによって施設が変わってくるのかなと思うんですけども。</p> <p>あとは、お産のときのタクシーのような、自力で行くとかタク</p>

シーを呼べというのではなくて、そういったサービスがあったらいいのになというお話ですとか。

あと、母子手帳をつくば市では保健センターで交付だと思うんですけども、他の自治体では、産院で交付をしてくれるところがあるみたいで。母子手帳を貰うときって、つわりとかでお母さんは体調が優れないことも多いので、そういうときに行くのは大変なので、できれば妊婦健診のときとかに一緒に交付も受けられないかという話がありました。

あとは、先ほど先生が診てくれるというところと助産師さんが診てくれるというところがあったんですけども、今回コロナとかもあって、非常にしんどいとか孤独だったり、気持ちの面でとてもつらい思いをしながら出産をされている方がかなりいらっしゃるというのは感じています。そういった中で、例えばご自分の思ったようなお産にならなかったという方も結構いらっしゃるって、その思いを抱えながらすぐに赤ちゃんとの生活が始まって、こんなはずじゃないのになんでこんなふうになっているんだろうというような、ずっと心のつらさも身体をつらさも両方を抱えて一生懸命頑張っているお母さんもすごく多いなというのを感じています。

それで、お産のときに、何かそういったこんなはずじゃなかったのにとつらい思いを受け止めてもらえるようなケアが、お産の後とかに心のケアですね、そういうのがあればもうちょっと、お産直後のおうちでの赤ちゃんとの生活も楽しめたのかなという、そういうお話もありました。バースセンターが、要はリスクがないお産の方という話もあったんですけども、リスクがあるとか、例えば緊急で帝王切開になってしまったりとか、そういった

普通分娩でお産が終えられなかったお母さんたちというのが、普通分娩が良いお産だったねみたいな感じで言われることが結構あって、じゃあ私たちは良いお産じゃなかったのって感じ取ってしまう。そういう表現をされると、モヤモヤするなというお母さんの声を何人か聞いています。良いお産というものの言い方はそれぞれかもしれないんですけども、緊急の帝王切開とかって言っちゃうと、もうお母さんの意思関係なくなってしまうので、自分でコントロールできなくていろんなことが起こっていくので。お母さんのそういったつらさとか、その時のお産のいろんな経験をお母さんが受け止められていないと、結局その後のお子さんとの生活にもすごく関わってきて、やっぱりちょっとこう鬱っぽくなっちゃうだとか。そういうふうに繋がっていくようなイメージが非常にできるというか。そういった感じのお話も聞いていますので、そういったリスクの話も、例えば、母親学級とか何か病院でも、妊婦さんのへの母親学級みたいな場で、そういったこともありますよというお話が少しあってもいいのかなと。そういった前情報も何もなくて、普通お産はこうなります、生まれた後はこうなりますというお話が母親学級はすごく多いと思うんですけども、それだけではなくて、こういったリスクも少ないけどあるんですよ、そういった時にはこのような流れになりますよとか。良いお産というか、普通分娩じゃなくてそういった分娩もあるということとか。それからお母さんはこうなりますよというところの前情報が、お母さんたちが知りたかったというお話がありました。ですので、母親学級だったり、何か情報が伝えられるような場がそれぞれの病院であるのでしたら、ぜひ提供していただけたら、お母さんたちも準備というか、そういうことももしかしたらある

	<p>かもしれないんだというのがあったほうが、万一の時の心構えと いうか、少し安心をしてお産を迎えられるのかなと思いましたの で、ぜひお願いできたらなと思います。バースセンターで、もし 助産師さんがそういったお母さんたちの心のケアとか産後のケア をしてくださっているのであれば、それだけぜひ助産師さん主体 じゃなくても、他の施設とかにも来ていただけると、お母さんた ちの産後はすごく変わっていく。お母さんたちの気持ちもすごく 楽になっていくのかなと思いますので、ぜひお願いできたらなと 思います。長々と失礼しました。</p>
黒田委員（座 長）	<p>ありがとうございました。</p> <p>結果として、僕も、皆さん大学もそうなんですけど、助産師と 医師とでやりたいんですけどどうしても分娩数が1,000件超えて いたりだとか、ジレンマに。産後ケアとかもすみません、つくば 市だけでなく牛久市とか他の自治体でも受けていますので、1人 に対してゆっくりさせてあげますって取り組んでいますけど、こ れもう、施設・大学問わずなんですけど、ジレンマに立ち入って いるんですけど。毎日日常がくるものですので、間野さんの貴重 な意見もありがたいし、そう言っていただけると、吸い上げる場 もなかったので私どもも非常に参考になりますけど。なんか、つ くば市だけ陣痛タクシーが再開してないとか言っていましたけど、 つくば市の陣痛タクシーはどうなっているんだろうとか聞か れるんですけど、患者さんへの情報はあまりないですけど後で教え ていただければと思いますけど。</p> <p>間野さんから、筑波大学では無痛分娩しないという意見があっ たんですが、濱田先生どんな感じなんでしょうか。</p>
濱田先生	<p>今のところは無痛分娩はやってないんですけども、無痛分娩</p>

様式第1号

	<p>に関しては、将来というか、割と直近の将来の検討事項だとは思 っていて、麻酔科と協議は始めています。ただ現時点ではやって いないです。</p>
黒田委員（座 長）	<p>ありがとうございます。 まだご意見、ありますでしょうか。</p>
	<p>以上で、意見交換等が終了しましたので、これで座長の任を解 かせていただきたいと思います。ありがとうございました。</p>
鈴木課長補佐	<p>ありがとうございました。皆様、ご意見長時間にわたりまして ありがとうございました。以上で、つくば市バースセンター懇話 会を閉会いたします。 なお、つくば市バースセンターに関する懇話会につきましては、 次回は令和4年の5月か6月頃に開催予定としております。 また、本日の内容を踏まえ、引き続きバースセンターのあり方 について検討して参りたいと思いますので、今後ともご協力の方、 お願いいたします。 お疲れ様でした。ありがとうございました。</p>

令和3年度つくば市バースセンターに関する懇話会次第

日 時：令和4年1月31日（月）

午後6時30分から

場 所：つくば市役所2階 防災会議室3

1 開 会

2 部長挨拶

3 委員紹介

4 事務局紹介

5 議事

(1) 意見交換

(2) 報告事項

① つくば市バースセンター利用状況及びつくば市寄附講座について
(資料1、2)

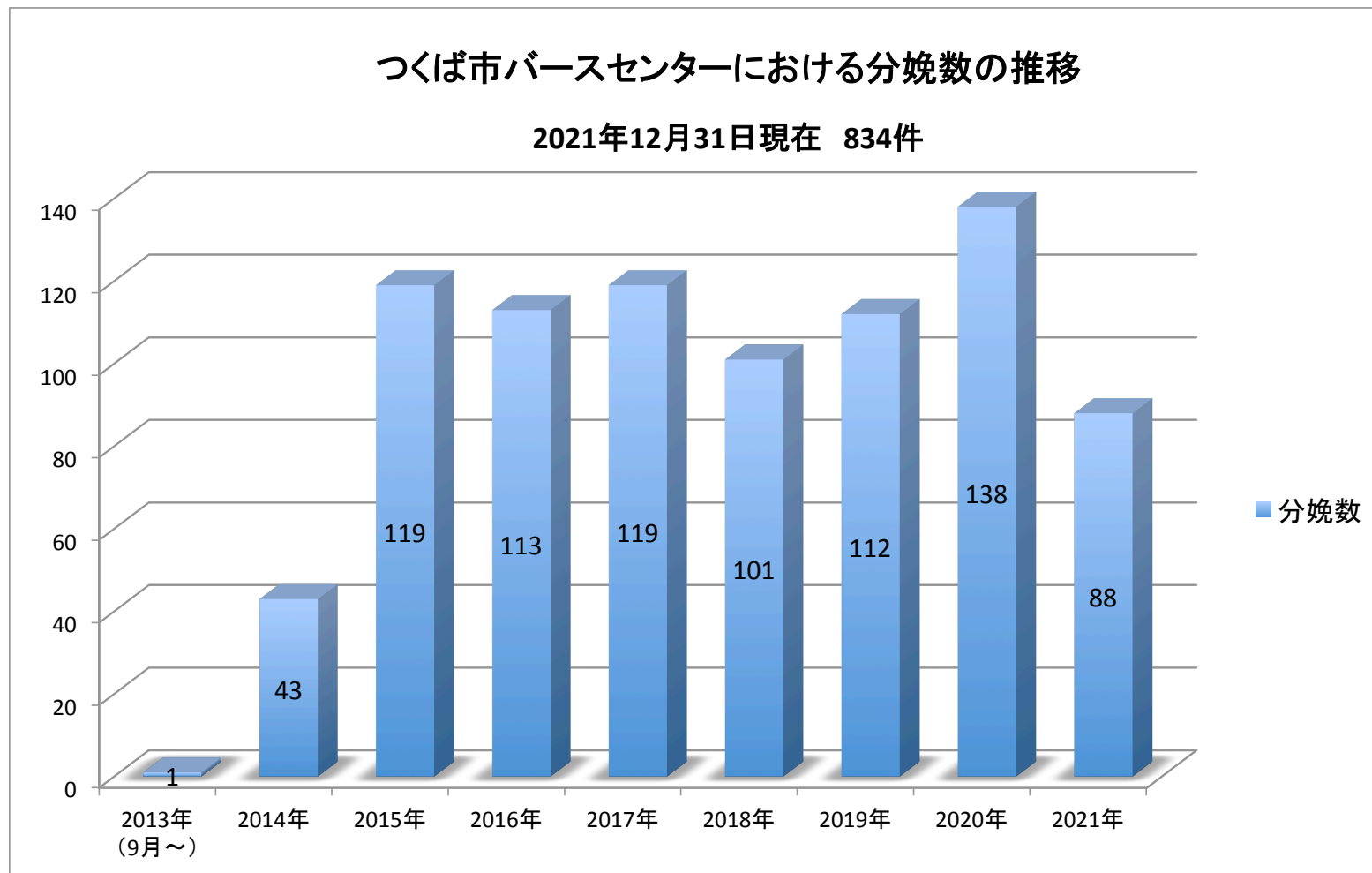
② つくば市バースセンター施設整備の進捗について (資料3)

③ 市民アンケート調査（あかちゃん訪問時）結果について (資料4)

(3) 質疑応答

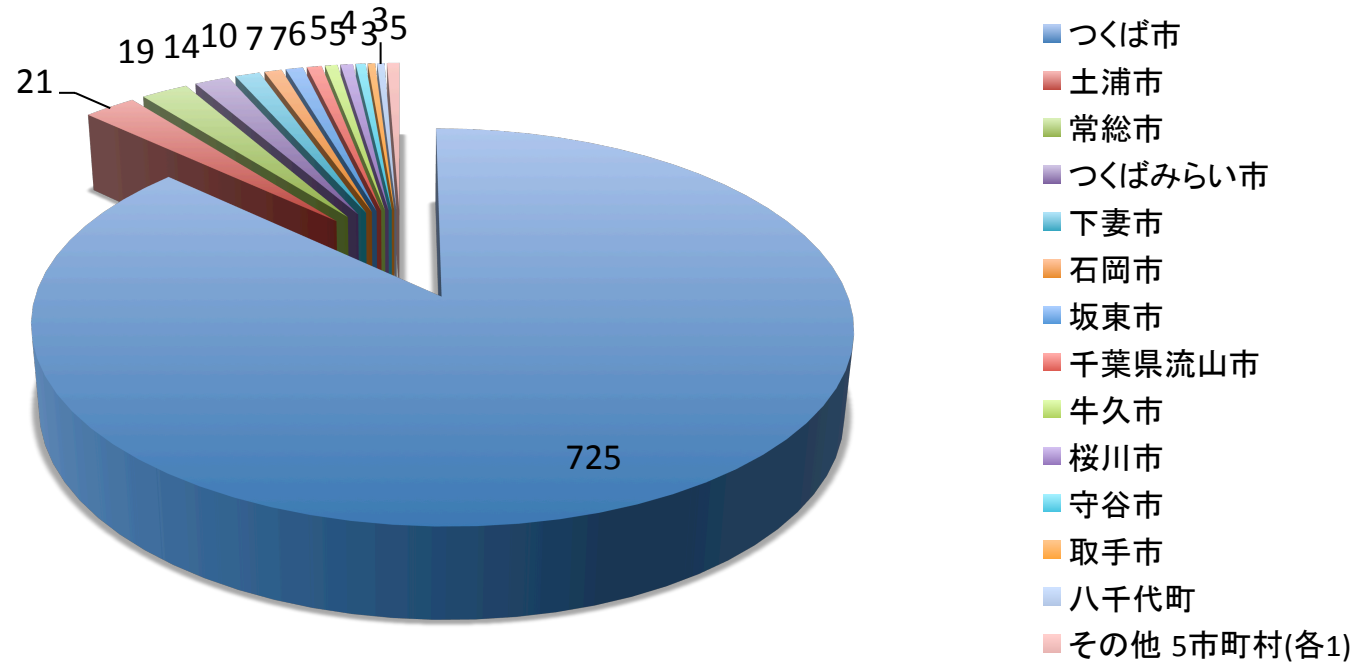
(4) その他

6 閉会



つくば市バースセンターで分娩した女性834名の住所地

つくば市民の割合＝86.9%



※ 里帰り分娩の場合は実家の住所地を示す

【寄附講座構成員】

- ・ 教授 : 濱田 洋実
- ・ 准教授 : 小島 真奈
- ・ 講師 : 大原 玲奈

【教育について】

本寄附講座の目的は、地域周産期医療体制の充実・向上のために、周産期医療を担う医師及び助産師の養成・確保を行うこと、将来にわたってつくば市民の安全で安心な出産の場を安定的に提供すること、の2つである。これらの目的の達成のために、筑波大学附属病院内につくば市バースセンターを設置した上で、筑波大学医学群および大学院人間総合科学学術院学位プログラムの学生、ならびに医師免許・助産師免許を取得したばかりの者等に対する周産期医療教育を遂行している。

医学生ならびに初期臨床研修医に対しては、産科臨床教育を通じて周産期医療に従事する魅力を伝えるとともに、地域における周産期医療の重要な役割について十分理解させることに努めている。この結果、2020年度に新たに後期臨床研修医として筑波大学附属病院において産婦人科を専攻する14名の医師の誕生に寄与することができた。これら産婦人科専攻医のうち7名については、本年度を通して本寄附講座で地域周産期医療に関する研修を行った（残り7名については、本年度は県内の他の施設で研修を行っており、来年度、本寄附講座での研修が予定されている）。加えて、2019年度までに産婦人科の後期臨床研修を開始した専攻医21名について、引き続き周産期医療教育を遂行した。これらの医師は、つくば市における地域周産期医療体制の充実・向上に寄与すると考えられる。医学生については、筑波大学医学群医学類43回生全員に対して、4～5年生時の1名2週間の臨床実習を通して周産期医学の教育を行うとともに、特につくば市を中心とした地域における周産期医療従事者の実際を説明、その魅力を伝えた。なお、本年度は新型コロナウイルス感染症対策のために、オンライン臨床実習を積極的に併用した。今後も引き続き、これらの初期臨床研修医ならびに医学生に対する教育を継続していく所存である。

一方、助産師については、助産師免許取得を目指す大学院人間総合科学学術院看護科学学位プログラムの学生、および入職・異動により新たに筑波大学附属病院のつくば市バースセンターもしくは産科病棟における勤務を開始した助産師に対して、周産期医療教育を通じて、特につくば市を中心とした地域において助産師として勤務する魅力を伝えることに尽力している。2020年度は、大学院人間総合科学学術院看護科学学位プログラムの4名の学生、ならびに入職・異動により新たに筑波大学附属病院のつくば市バースセンターもしくは産科病棟における勤務を開始した9名の助産師に新たに周産期医療教育を行った。

【研究について】

上記した本寄附講座の目的を達成するために、周産期医療に関する様々な研究を遂行している。これまでの成果は、学術誌への論文（英文・和文）発表ならびに様々な学会発表を通じて公表してきた。研究内容は周産期医療領域全般の多岐にわたるが、これらの研究成果を通じて、つくば市における周産期医療の充実・向上に寄与することができたと考えており、来年度以降も引き続き様々な研究を積極的に遂行していく計画である。

なお、2020年4月～2021年3月の具体的な研究業績（英文原著論文5件、和文原著論文8件、その他論文・著書7件、学会発表13件、その他発表0件）の詳細を、以下の「研究業績一覧」に示す。

筑波大学 つくば市寄附講座総合周産期医学 研究業績一覧（2020年度）

※ 本寄附講座構成員には下線を付した。

【論文】

<英文原著論文>

Keiko Nishida, Toshimi Sairenchi, Koji Uchiyama, Yasuo Haruyama, Mariko Watanabe, Hiromi Hamada, Toyomi Satoh, Susumu Miyashita, Ichio Fukasawa, Gen Kobashi: Poor uterine contractility and postpartum hemorrhage among low-risk women: a case-control study of a large-scale database from Japan. International Journal of Gynecology and Obstetrics, in press

Hirayasu Kai, Joichi Usui, Takashi Tawara, Mayumi Takahashi, Ishii Ryuta, Ryoya Tsunoda, Akiko Fujita, Kei Nagai, Shuzo Kaneko, Naoki Morito, Chie Saito, Hiromi Hamada, Kunihiro Yamagata: A case of anti-glomerular basement membrane glomerulonephritis during the first trimester of pregnancy. Internal Medicine, 60(5), 765-770, 2021

Kei Miyakoshi, Atsuo Itakura, Takayuki Abe, Eiji Kondoh, Yasuhisa Terao, Tsutomu Tabata, Hiromi Hamada, Kyoko Tanaka, Mamoru Tanaka, Naohiro Kanayama, Satoru Takeda: Risk of preterm birth after the excisional surgery for cervical lesions: a propensity-score matching study in Japan. Journal of Maternal-Fetal & Neonatal Medicine, 34(6), 845-851, 2021

Hiroaki Itoh, Keisuke Ishii, Naoya Shigeta, Atsuo Itakura, Hiromi Hamada, Takeshi Nagamatsu, Tomohiko Ishida, Yasuaki Bungyoku, Ali Falahati, Miori Tomisaka, Mikiya Kitamura: Efficacy and safety of controlled release dinoprostone vaginal delivery system (PROPESS) in Japanese pregnant women requiring cervical ripening: Results from a multicenter, randomized, double-blind, placebo-controlled phase III study. Journal of Obstetrics and Gynaecology Research, 47(1), 216-225, 2021

Kensaku Mori, Tsukasa Saida, Sodai Hoshiai, Yoko Shibuya, Mana Obata-Yasuoka, Toshitaka Ishiguro, Hiroaki Takahashi, Hiromi Hamada, Toyomi Sato, Manabu Minami: High prevalence of intrapelvic parasitic arteries in patients with placenta accreta spectrum: A case-control study using unenhanced magnetic resonance angiography. Clinical Imaging, 63, 50-56, 2020

<和文原著論文>

遠藤英作, 小島真奈, 宮代夢子, 照屋浩実, 足立結華, 西田恵子, 飯場萌絵, 眞弓みゆき, 阿部春奈, 大原玲奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 膣長鎖アシル CoA 脱水素酵素欠損症（骨格筋型）合併妊娠の一例. 日本周産期・新生児医学会雑誌, 57(1), 印刷中

菊池友明, 阿部春奈, 八木洋也, 木村友沢, 細川義彦, 飯場萌絵, 西田恵子, 眞弓みゆき, 大原玲奈, 小島真奈, 濱田洋実: 先天性 Mid-Aortic syndrome 合併妊娠の1例. 日本周産期・新生児医学会雑誌, 57(1), 印刷中

柿沼麗於奈, 大原玲奈, 木村友沢, 細川義彦, 西田恵子, 飯場萌絵, 阿部春奈, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 未受診外国人妊婦で分娩進行中に判明した HIV 感染妊娠の 1 例. 関東連合産科婦人科学会誌, 58(1), 61-66, 2021

星野沙也加, 飯場萌絵, 蒲田 郁, 木村友沢, 細川義彦, 西田恵子, 阿部春奈, 眞弓みゆき, 大原玲奈, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 子宮動脈瘤に対する子宮動脈塞栓術後に正常経膈分娩した 1 例. 関東連合産科婦人科学会誌, 58(1), 31-36, 2021

堤 春香, 細川義彦, 飯場萌絵, 大原玲奈, 八木洋也, 小島真奈, 濱田洋実, 高橋実穂: 胎児心房粗動 4 例の臨床像. 関東連合産科婦人科学会誌, 57(4), 511-519, 2020

渡辺麻紀子, 八木洋也, 木村友沢, 津曲綾子, 細川義彦, 飯場萌絵, 西田恵子, 阿部春奈, 大原玲奈, 小島真奈, 佐藤豊実, 濱田洋実: 初期臨床研修における『妊娠・授乳と薬』に関する研修の現状～初期研修医の産婦人科再必修化を前に～. 関東連合産科婦人科学会誌, 57(4), 403-409, 2020

鈴木あすか, 八木洋也, 蒲田 郁, 木村友沢, 渡辺麻紀子, 細川義彦, 飯場萌絵, 阿部春奈, 大原玲奈, 小島真奈, 佐藤豊実, 濱田洋実: 他診療学会作成の診療ガイドラインにおける妊娠に関連する記述 -産婦人科医の認知率、活用率とその問題点-. 日本周産期・新生児医学会雑誌, 56(2), 254-260, 2020

宮本和恵, 小島真奈, 堤 春香, 木村友沢, 津曲綾子, 細川義彦, 飯場萌絵, 西田恵子, 阿部春奈, 大原玲奈, 八木洋也, 佐藤豊実, 濱田洋実: 産婦人科診療ガイドライン-産科編 2017「妊娠・授乳と薬」関連 CQ&A に対する小児科医師の認知と評価. 日本周産期・新生児医学会雑誌, 56(1), 43-48, 2020

<和文総説>

小島真奈: 妊娠中のマイナートラブル: 頭痛 (特集「周産期の薬」). 周産期医学, 50(増刊), 258-261, 2020

濱田洋実: 我が国の添付文書と海外の胎児リスク評価の読み方 (特集「周産期の薬」). 周産期医学, 50(増刊), 57-61, 2020

大原佑介, 榎本剛史, 大和田洋平, 北口大地, 久倉勝治, 明石義正, 小川光一, 高橋一広, 下村 治, 大原玲奈, 八木洋也, 小島真奈, 濱田洋実, 小田竜也: 分娩時第 4 度会陰裂傷に対する修復術: 排便障害を回避する術式の工夫. 産婦人科手術, 31, 27-30, 2020

濱田洋実: 妊娠と薬 (特集「【必携】専攻医と指導医のための産科診療到達目標」). 周産期医学, 50(8), 1471-1474, 2020

<和文著書>

濱田洋実: 骨盤位牽出術. 婦人科専門医のための必修知識 2020 年度版 (日本産科婦人科学会編), 日本産科婦人科学会, 東京, B204-B206, 2020

濱田洋実: 日本における医薬品添付文書の記載要領と問題点. 薬物治療コンサルテーション: 妊娠と授乳 改訂 3 版 (伊藤真也, 村島温子編), 南山堂, 東京, 90-99, 2020

濱田洋実: 女性ホルモン製剤, 子宮用剤. 今日の治療薬 2020 年版 (浦部晶夫, 島田和幸, 川合眞一編), 南江堂, 東京, 426-444, 2020

【学会発表】

<一般口演・ポスター発表>

小西晶子, 佐村 修, 室本 仁, 岡本陽子, 高橋宏典, 笠井靖代, 市川麻祐子, 山田直樹, 加藤紀子, 佐藤 浩, 濱田洋実, 中並尚幸, 町 麻耶, 市塚清健, 堀谷まどか, 森本恵爾, 高橋 健, 岡本愛光, 関沢明彦, 左合治彦: 双胎妊娠における染色体異常の発生頻度に関する調査研究. 日本人類遺伝学会第 65 回大会, 2020 年 11 月

能町しのぶ, 岡邑和子, 渡邊浩子, 濱田洋実: 妊娠糖尿病妊婦の非妊時体格別栄養素等摂取状況-耐糖能正常妊婦との比較-. 第 36 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 2020 年 11 月

柿沼麗於奈, 阿部春奈, 西田恵子, 飯場萌絵, 眞弓みゆき, 大原玲奈, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 胎児期に頭蓋内囊胞を指摘され出生後診断に至った硬膜動静脈瘻の一例. 第 140 回関東連合産科婦人科学会学術集会、2020 年 11 月

加藤 京, 小西久美, 日高大介, 宮園弥生, 濱田洋実, 土岐浩介, 高田英俊, 本間真人: 抗てんかん薬および向精神薬による新生児薬物離脱症候群に関する実態調査. 日本病院薬剤師会関東ブロック第 50 回学術大会、2020 年 10 月

西谷明子, 山崎範子, 濱田洋実, 高嶋泰之, 鶴嶋英夫, 荒川義弘: 複雑なプロトコルに対するリスクベースドアプローチの試み. 第 20 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2020 in 長崎、2020 年 10 月

梅澤理恵子, 小西久美, 本間真人, 濱田洋実: 抗 HIV 薬の催奇形性を臨床研究から考える (教育シンポジウム「新型コロナウイルスに対して有効性が期待される医薬品の催奇形性を考える」). 第 60 回日本先天異常学会学術集会、2020 年 7 月

柿沼麗於奈, 大原玲奈, 木村友沢, 細川義彦, 西田恵子, 飯場萌絵, 阿部春奈, 八木洋也, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 未受診で分娩進行中に判明した HIV 感染妊娠の 1 例. 第 139 回関東連合産科婦人科学会学術集会、2020 年 6 月

飯場萌絵, 星野沙也加, 蒲田 郁, 木村友沢, 細川義彦, 西田恵子, 阿部春奈, 大原玲奈, 八木洋也, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 子宮動静脈 に対する子宮動脈塞栓術後に正常経膈分娩した 1 例. 第 72 回日本産科婦人科学会学術講演会、2020 年 4 月

細川義彦, 堤 春香, 蒲田 郁, 木村友沢, 西田恵子, 飯場萌絵, 阿部春奈, 大原玲奈, 八木洋也, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実: 胎盤ポリープに対する子宮動脈塞栓術の有用性. 第 72 回日本産科婦人科学会学術講演会、2020 年 4 月

宮代夢子, 阿部春奈, 木村友沢, 津曲綾子, 細川義彦, 飯場萌絵, 西田恵子, 大原玲奈, 八木洋也, 小島真奈, 佐藤豊実, 濱田洋実: 膠原病合併妊娠におけるタクロリムス使用の母児への影響. 第 72 回日本産科婦人科学会学術講演会、2020 年 4 月

原 絢香, 大原玲奈, 木村友沢, 細川義彦, 飯場萌絵, 阿部春奈, 八木洋也, 小島真奈, 石津智子, 野口恵美子, 濱田洋実, 佐藤豊実: ロイス・デイツ症候群合併妊娠の 1 例. 第 72 回日本産科婦人科学会学術講演会、2020 年 4 月

宮本和恵, 小島真奈, 堤 春香, 木村友沢, 細川義彦, 飯場萌絵, 西田恵子, 阿部春奈, 大原玲奈, 八木洋也, 佐藤豊実, 濱田洋実: 「産婦人科診療ガイドライン-産科編 2017」の妊娠・授乳と医薬品関連 CQ & A に対する小児科医師の認知と評価の状況. 第 72 回日本産科婦人科学会学術講演会、2020 年 4 月

鈴木あすか, 八木洋也, 蒲田 郁, 木村友沢, 渡辺麻紀子, 細川義彦, 飯場萌絵, 阿部春奈, 大原玲奈, 小島真奈, 佐藤豊実, 濱田洋実: 他診療科学会作成の診療ガイドラインにおける妊娠に関連する記述 -産婦人科医の認知度、活用度とその問題点-. 第 72 回日本産科婦人科学会学術講演会、2020 年 4 月

<その他>

なし

令和4年1月31日

筑波大学附属病院

つくば市バースセンター施設整備の進捗について

1. 施設整備建物及び場所

筑波大学附属病院B棟6階

2. 病室数及び面積

- (1) 病室数 個室12室（LDR配備）
- (2) 諸室 受付・待合室、診察・検査室、スタッフステーション等
- (3) 面積 約2,000㎡（病室、諸室及び廊下等の共有部分を含む。）

3. 供用開始時期（予定）

令和5年7月

※ 現時点における供用開始時期であり、今後の社会情勢の変化等に応じて供用開始時期が延伸することもあり得る。

4. 供用開始に向けた工程

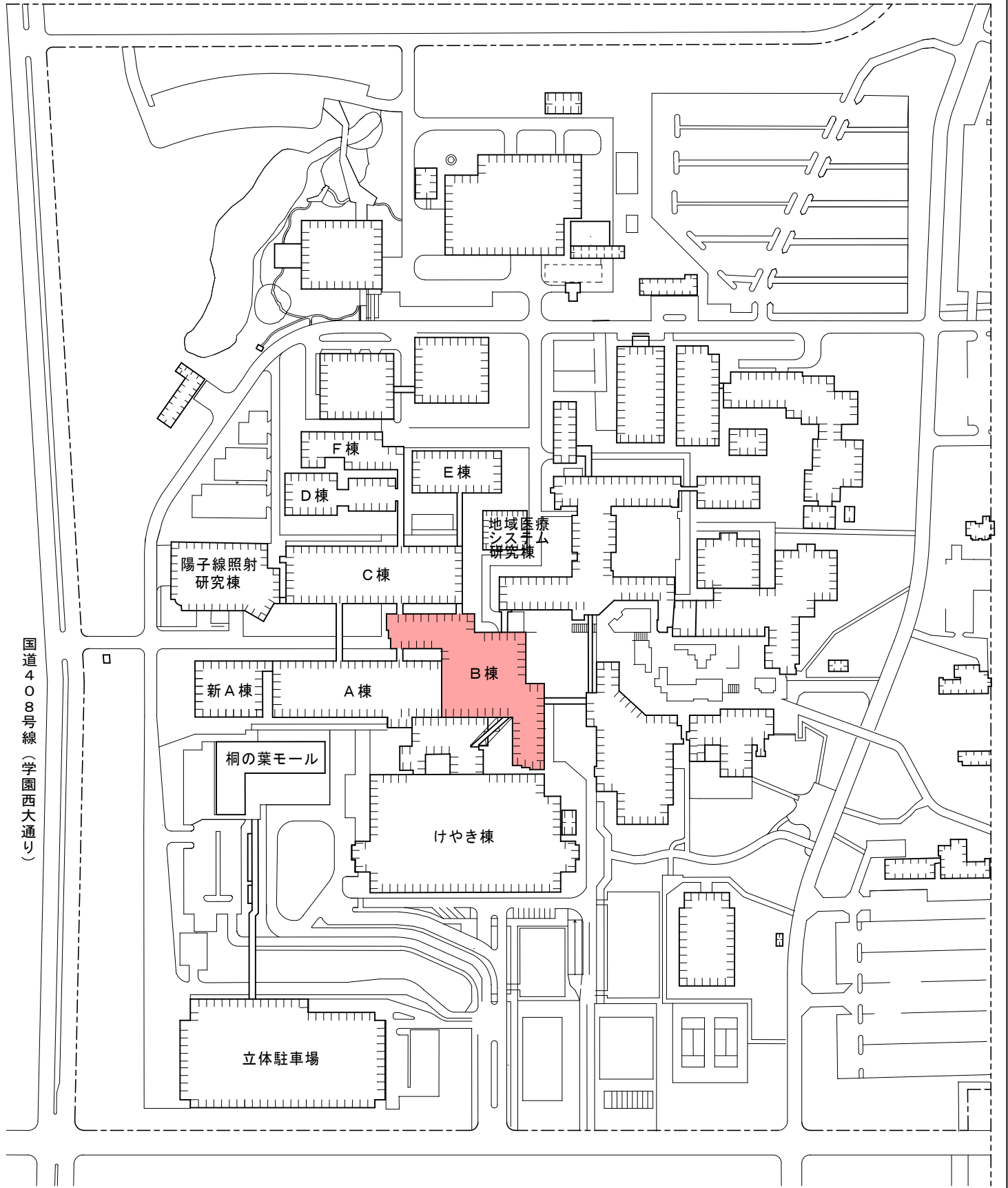
- (1) 令和元年6月 優先交渉権者決定（株大林組）
 - (2) 令和元年7月 基本協定・設計業務委託契約
 - (3) 令和2年9月 工事請負契約の締結
 - (4) 令和2年10月～令和5年12月 B棟全面改修
- ※ 令和5年1月～令和5年6月 つくば市バースセンター施設整備

5. 参考情報

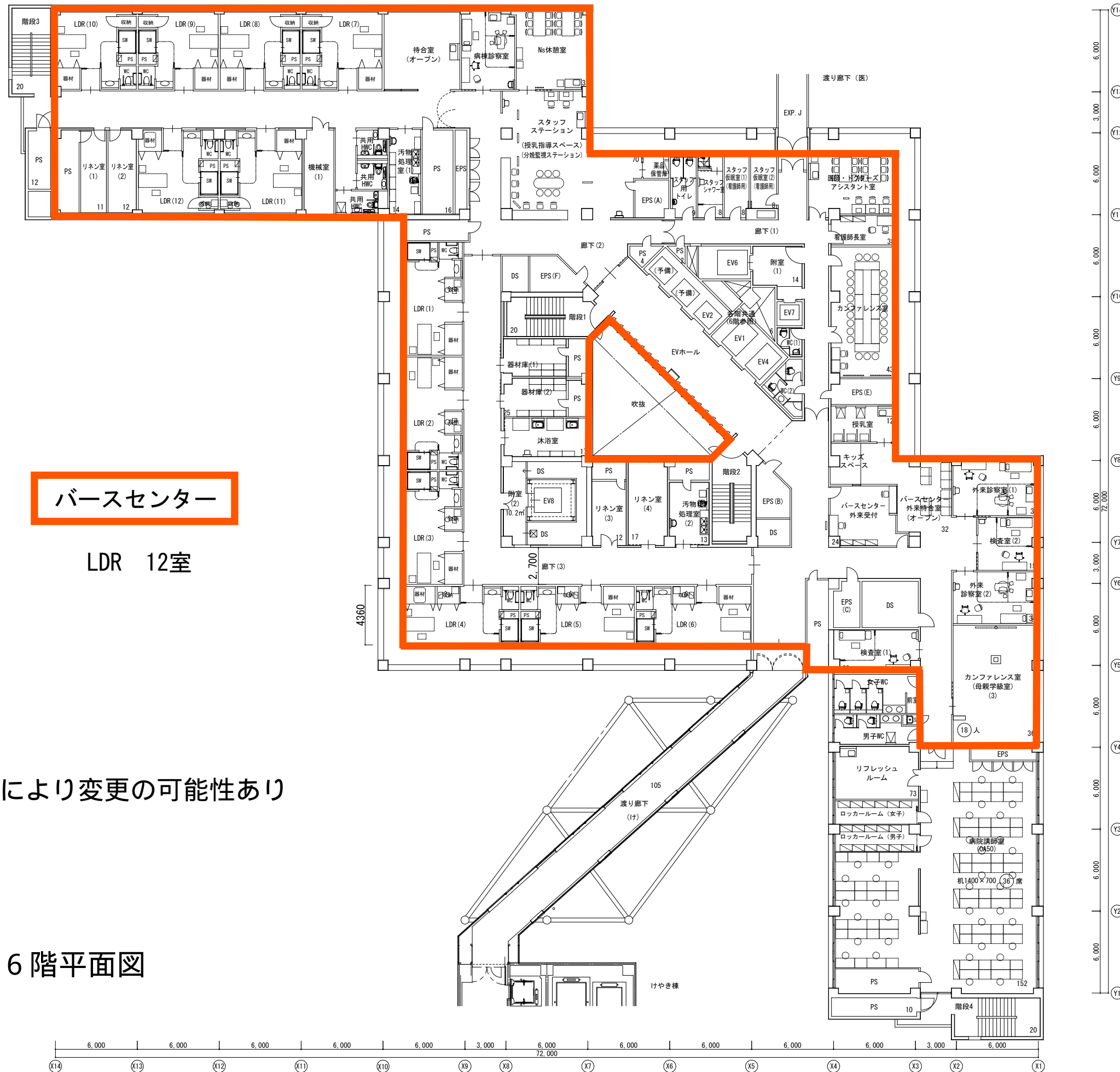
今般のB棟全面改修に伴い、現在けやき棟5階に位置するNICU及びGCUを各々6床増床してB棟5階（つくば市バースセンターの階下）に移転拡充する。

・NICU 15床 ← 9床

・GCU 24床 ← 18床



西地区配置図



バースセンター

LDR 12室

今後の状況により変更の可能性あり

B棟6階平面図

A3:1/300

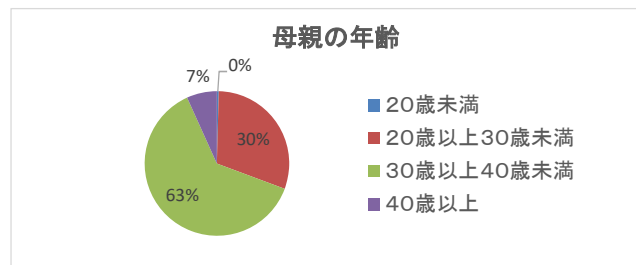
資料4

(令和2年度)あかちゃん訪問調査時における市民の出産場所等に関するアンケート調査

1 調査の目的	本調査は、市民の出産場所に関する状況把握のため実施
2 調査期間	令和2年(2020年)4月1日～令和3年(2021年)3月31日(12ヶ月分)
3 調査対象	主に市内に住所を有する、概ね生後4ヶ月未満の赤ちゃんを持つ母親
4 配布枚数	2,232枚
5 回収枚数	1,933枚
6 回収率	86.6%
7 調査方法	保健師の戸別訪問時に記名式アンケートを行う。 * 質問項目により、無回答のものも散見している。

■母親の年齢

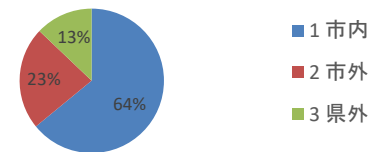
	回答(人)	割合
1 20歳未満	8	0.4%
2 20歳以上30歳未満	582	30.3%
3 30歳以上40歳未満	1,201	62.5%
4 40歳以上	130	6.8%
合計	1,921	100.0%



■出産した医療機関の場所

	回答(人)	割合
1 市内	1,233	64.1%
2 市外	443	23.0%
3 県外	248	12.9%
合計	1,924	100.0%

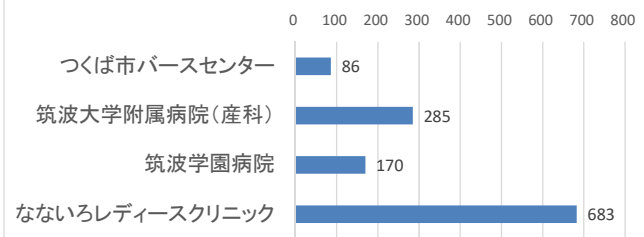
出産した医療機関の場所



■出産した市内の医療機関

	回答(人)	割合
1 つくば市バースセンター	86	7.0%
2 筑波大学附属病院(産科)	285	23.3%
3 筑波学園病院	170	13.9%
4 なないろレディースクリニック	683	55.8%
合計	1,224	100.0%

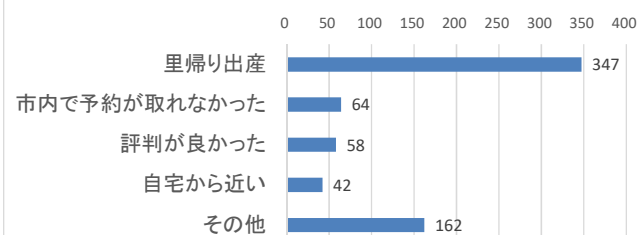
出産した市内の医療機関



■市外・県外の医療機関で出産した理由(複数回答)

	回答(人)	割合
1 里帰り出産	347	51.6%
2 市内で予約が取れなかった	64	9.5%
3 評判が良かった	58	8.6%
4 自宅から近い	42	6.2%
5 その他	162	24.1%
合計	673	100.0%

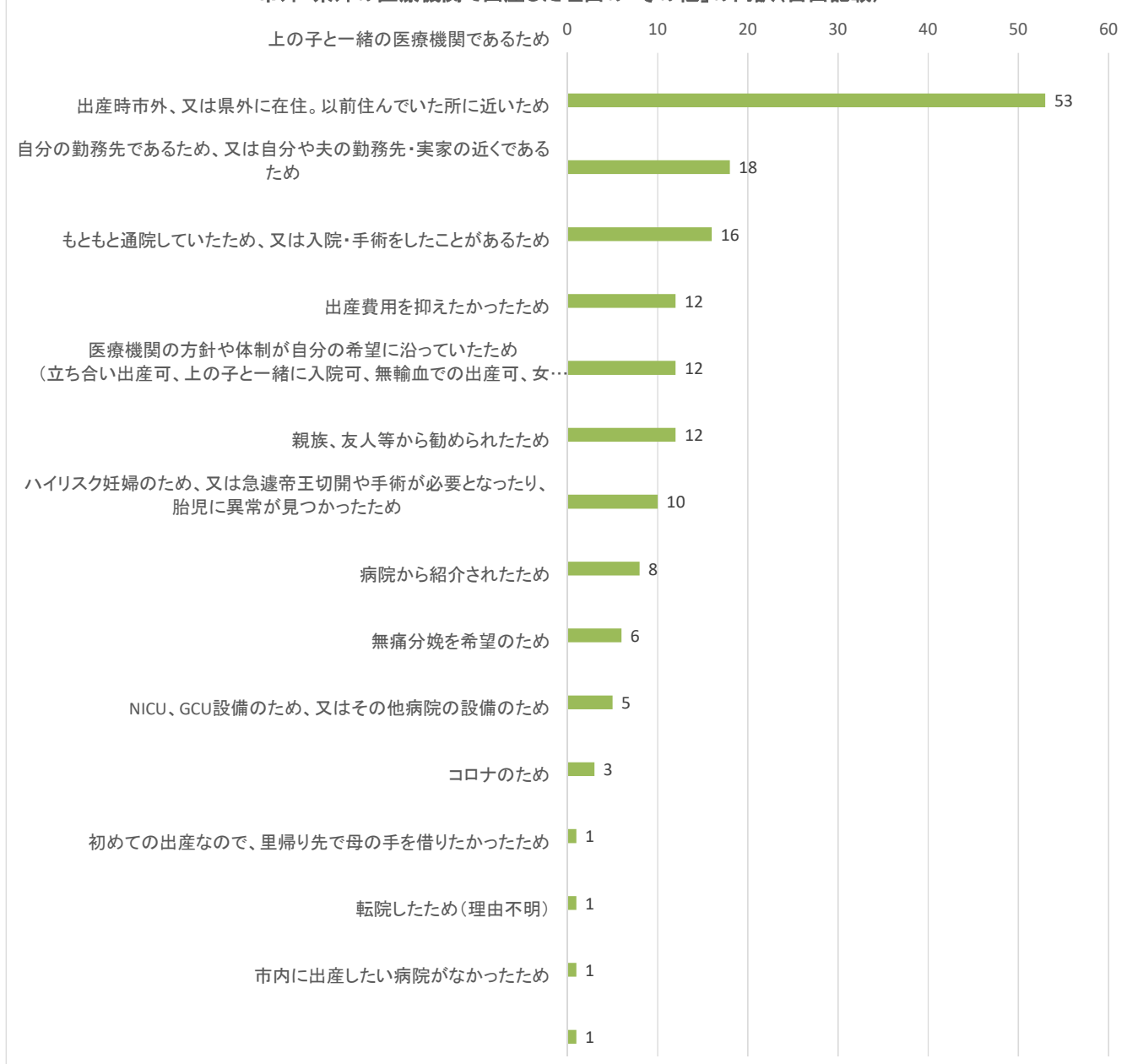
市外・県外の医療機関で出産した理由(複数回答)



■市外・県外の医療機関で出産した理由の「その他」の内訳(自由記載)

主な理由		件数(件)
1	上の子と一緒に医療機関であるため	53
2	出産時市外、又は県外に在住。以前住んでいた所に近いため	18
3	自分の勤務先であるため、又は自分や夫の勤務先・実家の近くであるため	16
4	もともと通院していたため、又は入院・手術をしたことがあるため	12
5	出産費用を抑えたかったため	12
6	医療機関の方針や体制が自分の希望に沿っていたため (立ち合い出産可、上の子と一緒に入院可、無輸血での出産可、女医が多い、大きな病院又は助産院である、	12
7	親族、友人等から勧められたため	10
8	ハイリスク妊婦のため、又は急遽帝王切開や手術が必要となったり、胎児に異常が見つかったため	8
9	病院から紹介されたため	6
10	無痛分娩を希望のため	5
11	NICU、GCU設備のため、又はその他病院の設備のため	3
12	コロナのため	1
13	初めての出産なので、里帰り先で母の手を借りたかったため	1
14	転院したため(理由不明)	1
15	市内に出産したい病院がなかったため	1
合計		159

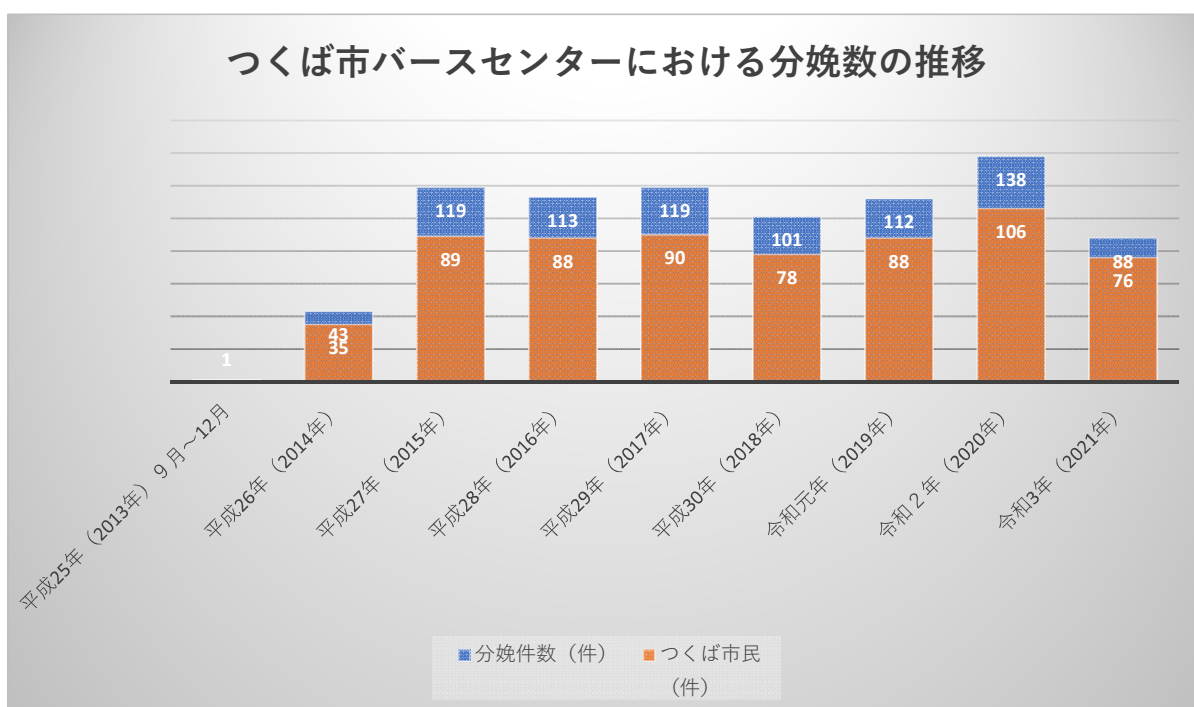
市外・県外の医療機関で出産した理由の「その他」の内訳(自由記載)



1 つくば市バースセンターにおける分娩数の推移

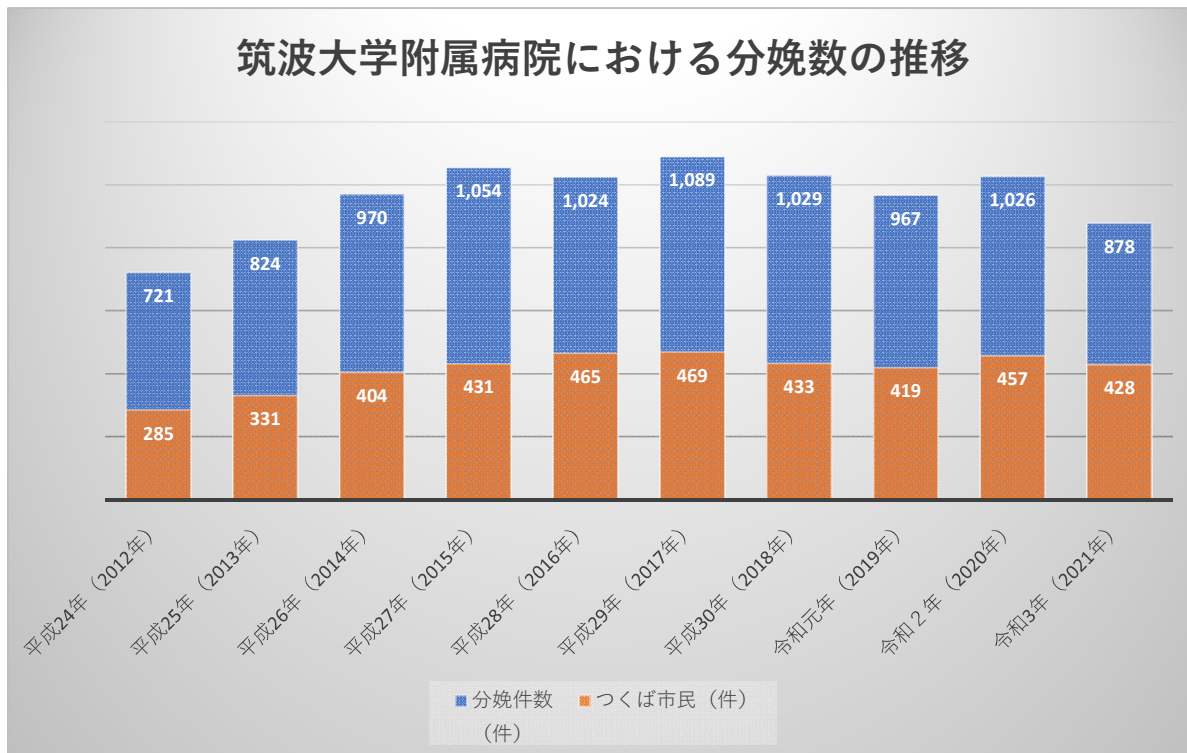
*年集計（1月～12月）

年	分娩件数 (件)	つくば市民 (件)	つくば市民 割合 (%)	分娩 累計件数 (件)	つくば市民 累計件数 (件)	つくば市民 累計割合 (%)
平成25年（2013年）9月～12月	1	1	100.0	1	1	100.0
平成26年（2014年）	43	35	81.4	44	36	81.8
平成27年（2015年）	119	89	74.8	163	125	76.7
平成28年（2016年）	113	88	77.9	276	213	77.2
平成29年（2017年）	119	90	75.6	395	303	76.7
平成30年（2018年）	101	78	77.2	496	381	76.8
令和元年（2019年）	112	88	78.6	608	469	77.1
令和2年（2020年）	138	106	76.8	746	575	77.1
令和3年（2021年）	88	76	86.4	834	651	78.1
累計数	834	651	78.1	834	651	78.1



2 筑波大学附属病院における分娩数の推移 *年集計（1月～12月）

	分娩件数 (件)	つくば市民 (件)	つくば市民 割合 (%)
平成24年 (2012年)	721	285	39.5
平成25年 (2013年)	824	331	40.2
平成26年 (2014年)	970	404	41.6
平成27年 (2015年)	1,054	431	40.9
平成28年 (2016年)	1,024	465	45.4
平成29年 (2017年)	1,089	469	43.1
平成30年 (2018年)	1,029	433	42.1
令和元年 (2019年)	967	419	43.3
令和2年 (2020年)	1,026	457	44.5
令和3年 (2021年)	878	428	48.7
累計数	9,582	4,122	43.0



3 産婦人科を専攻する医師及び助産師数

* 年度集計

	医師数 (人)	医師の勤務地内訳 (人)			
		筑波大	市内	県内	県外
平成25年 (2013年)	5	1	2	2	0
平成26年 (2014年)	4	1	1	2	0
平成27年 (2015年)	6	2	2	2	0
平成28年 (2016年)	5	2	1	2	0
平成29年 (2017年)	4	2	0	2	0
平成30年 (2018年)	9	1	1	6	1
令和元年 (2019年)	8	2023年3月後期研修修了予定			
令和2年 (2020年)	14	2024年3月後期研修修了予定			
令和3年 (2021年)	6	2025年3月後期研修修了予定			

< 予定 >

***年度ごとの後期研修修了時の状況の数を計上する**

	助産師 (人)	助産師の勤務地内訳数 (人)			
		筑波大	市内	県内	県外
平成25年 (2013年)	0	0	0	0	0
平成26年 (2014年)	2	2	0	0	0
平成27年 (2015年)	4	2	1	0	1
平成28年 (2016年)	5	2	2	1	0
平成29年 (2017年)	4	2	0	1	1
平成30年 (2018年)	5	2	1	0	2
令和元年 (2019年)	4	3	1	0	0
令和2年 (2020年)	4	3	0	0	1
令和3年 (2021年)	2	2023年3月大学院助産師養成課程修了予定			

※本学に助産師養成課程は無かった

< 予定 >

***年度ごと (大学院修了時) の状況の数を計上**

4 筑波大学附属病院産婦人科でのハイリスク妊産婦への対応

(1) 精神疾患既往もしくは合併妊婦分娩数 年間 96 名 (2021年実績)

上記ケース全例について、週1回の産科医師、精神科医師、助産師、ソーシャルワーカーによるミーティングを実施し、情報の共有、医学的管理方針の決定を行っている。

※うちつくば市民の支援数 年間 39 名 (2021年実績)

(2) 経済的に問題のある妊婦 年間約 30 名分娩

早期からソーシャルワーカーが関与している。

※うちつくば市民の支援数 年間約 10 名